Y05a　全国の科学館と連携した天体現象のライブ配信「エクリプス・カフェ」の評価

○縣秀彦、日江井榮二郎、大江将史（国立天文台）、飯塚康至（明星大学）

自然科学研究機構国立天文台は、日本科学技術振興機構の「研究者情報発信活動推進モデル事業」の委託を受けて、日食観測隊の遠征先であるトルコ・アドラサンより「Eclipse Cafe 2006」を実施した。このイベントは、大学、科学館および公開天文台と観測地との間をインターネット TV 会議でつないでのサイエンス・カフェで、日本時間の３月２９日（水）の１８時～２０時３０分に全国９会場を結んで行われた。　今回の双方向コミュニケーションイベントに参加した一般市民は約 300 名（集団Ａ）である。内訳は、りくべつ宇宙地球科学館（北海道）：１５名、ぐんま天文台（群馬県）：約６０名、和歌山大学（日本天文学会年会）（和歌山県）：約１２０名、広島市こども文化科学館（広島県）：９３名。　さらに、日食映像の受信のみをカフェ形式で行ったのは、平塚市博物館（神奈川県）：約６０名、北杜市須玉教育センター（山梨県）：約９０名、岩崎一彰・宇宙美術館（静岡県）：１０名、さじアストロパーク（鳥取県）：８名、国立科学博物館（東京都）：１５名の計 200 名弱（集団Ｂ）である。　ＡとＢの集団間で、事後アンケート調査の結果を比較してみたところ、明らかに集団Ａのほうが全体の満足度や天文学への関心の変化（高まり）が高かった。遠隔地からの情報伝達において今回行ったようなインターネットテレビ会議システムを利用した双方向コミュニケーションは、研究者情報発信の手法として利用価値が高いものと推察される。　残念なことに、Ｂグループへ正しい URL が伝えられなかったり、皆既日食直前に回線がダウンするなどのアクシデントに見舞われた。関係者の皆さまに深くお詫びするとともに、今後の中継においてこの教訓を生かしていきたい。